

特集「人文・芸術系のデータベース—今そしてこれから—」の編集にあたって

鈴木卓治¹

¹ 国立歴史民俗博物館情報資料研究部

およそ世の中の流れに違わず、人文系・芸術系の学問分野においても、いまやコンピュータは研究に欠かせない重要な構成要素となりつつある。しかしその貢献はいまだ文献情報検索や統計分析など、いくつかの典型的な応用例に限られているように思われる。また、感性情報処理やマルチメディアという用語に代表される“人間向きの”情報処理技術は、その方向性において当然人文・芸術系の研究活動と密接に結びついており、多大な貢献が予想されるものであるが、しかし現状では、人文・芸術系の研究者と情報処理技術者との協業は、双方にいくつかの問題点を含んでおり、決して順調とはいえない状況にある。

人文・芸術系の分野で典型的にみられるデータ群は、多種多様で雑然としており、マルチメディアであることが本質的な意味合いをもっている。また、利用者である研究者の主な関心は、データの個別化・特殊化・細分化に向いており、情報処理に都合のよい構造へのあてはめという作業がきわめて困難である(むしろ構造を与える過程そのものが研究の本質となる場合が多い)。現在の情報処理技術では最も扱いにくい対象といえる。

技術の発展が人間存在への貢献という方向軸を見失わないようにするためにも、我々はこのような人文・芸術系のデータ群に対して、未知の可能性に溢れた研究対象として積極的に取りあげていくべきであろう。情報処理学会では、人文科学とコンピュータ研究会(<http://syllab.nichibun.ac.jp/sigch/>)が、まさにその役割をになうものであり、また1995年度より、文部省科学研究費補助金の重点領域研究「人文科学とコンピューターコンピュータ支援による人文科学研究の推進—」が4年計画で開始され、その気運は高まっている。

本特集は、人文・芸術系分野におけるデータベース利用の現状と未来像について、いくつかの分野について、各分野の専門家に解説をお願いしたものである。各執筆者には、各分野の現状、マルチメディア技術の応用と期待、現状の問題点と解決法の示唆、の3点について書いていただくようお願いした。また、現場の経験に裏打ちされた忌

憚のない意見を述べていただくことで、問題点を明確に浮かびあがらせ、協業促進のポイントを見い出そうと試みた。

第1章は特集全体の総括であり、人文科学の諸分野におけるデータベースの現状とマルチメディア技術の応用について述べている。著者は人文科学とコンピュータ研究会の前主査であり、本特集の企画段階でもご協力を賜った。記して謝意を表します。

第2章から第5章までは人文系分野のデータベースの解説である。第2章は歴史学のデータベースについて、著者の体験談を中心にまとめられている。第3章は考古学のデータベースについて、マルチメディア技術への期待と注目が述べられている。第4章は民族学のデータベースについて、博物館というスタンスからの実践報告と将来への展望が示されている。第5章は文学のデータベースについて、海外の事情と日本の現状との比較および問題提起がなされている。

第6章以降は芸術系分野のデータベースの解説である。第6章では絵画情報のデータベースについて、情報の意味と価値の観点からの展望が示されている。第7章では美術品画像のデータベースについて、実用的観点からの諸技術と将来の見通しを述べている。第8章では音楽情報のデータベースについて、その現状と音楽情報の本質についての問題意識が述べられている。

多くの人文・芸術系の研究者は、いまだにパソコン上で細々と個人用のデータベースを作っており、最新技術の恩恵もあまり受けず、データの交換や公開についての諸問題に悩まされ続けているのが現状である。本特集が、情報処理技術の新たな刺激となり、有意義な協業を促進するひとつのきっかけとなれば、望外の喜びである。

なお、本特集をまとめるにあたり、執筆者ならびに読者の方には、厳しいスケジュールの中、貴重な時間を割いて取り組んでいただきましたこと、厚くお礼を申し上げます。

(平成9年3月15日)